

音への気付きから表現活動へ  
——音と対話し、感動を伝え合う楽しさを味わう——

From Awareness of Sounds to Expressive Activities  
by Sounds:  
Interact with Sounds and Enjoy Conveying  
Its Excitement to Each Other

田上 栄美子  
Emiko Tagami

はじめに

現代社会は音で溢れている。私たちの身近なまわりには数えきれない音が存在している。もちろん私たち自身も毎日音を聞いたり音を出したりしている。自然の音、生活の音などに加え、最近では「ピッピッ」「チン」と鳴る電子音や「自動」と名のつく電気機器などの「お知らせ音声」も身近な音として仲間入りするようになった。私たちはいろいろな音の中でも、これらの電子音が鳴れば、なぜか耳を働かせ敏感に反応してしまうと感じているのは筆者だけだろうか。それに対して、いろいろな音の中でも、鳥や虫の鳴き声、木々の葉が風に揺れる音、雨の音、風の音などの自然の音は、大人も子どもも誰もが聞いているはずなのに、その音に気付かなかつたり心に残らなかつたりするのはなぜだろうか。車の音や生活の音などにかき消されて、耳に届かなくなってしまったからだろうか。

私たちの耳は、いろいろな音をどのように聴いているのだろうか。すべての音を耳が受け入れ聴かなければならない状況であれば、私たちは常に大騒音に悩まされているはずである。しかし、「私たち大人は、例えば地下鉄の車両のなかがどんなにうるさくても、一緒にいる友人と会話をすることができます。逆に、自分に向けられた言葉でも、『聴きたくないこと』であれば耳に入れない、つまり無視すること<sup>1)</sup>」ができる。つまり、必要な音だけを聴き、必要でない音は聞き流しながら生活しているのである。大人はこのように音の選別ができるが、「これに対して子どもは、脳の聴覚情報の処理が未発達で、音の選別がまだうまくできません。そのため特定の音だけを拾って聴くことも、逆に聞き流すことも苦手<sup>2)</sup>」なのである。

私たち大人は、自分の意思で音を聴き分けられる優秀な耳をもっている。ところが、イヤフォンを着けて、自分だけの音楽に浸っている大人をよく見かける。公共の場であっても自分だけの時間を持つようとしているのか、あるいは他者との関係が煩わしいからなのか、音が溢れるあまり意図的に自分が聴きたい音以外の音をシャットアウトしようとしているからなのだろうか。このように、自然に親しみ自然の中の音に耳を傾け、自然の音の世界にどっぷり浸ることが少なくなっているように感じる。そこで、本稿では保育者養成校の学生を対象に行った授業の実践報告をする。その授業の目的は、自然の中の音や身近な音に耳を傾け聴き、感じ、気付く。気付いた音を表現し伝え合うことの楽しさを味わうことである。2021年度及び2022年度に行ったこどもの指導法「音楽表現」で取り組んだものである。子どもの感性を育むためには、保育者自身が感性を磨き豊かな感性をもっていることが求められる。学生の活動から「音と対話し、心を揺さぶられる感動を伝え合う楽しさを味わう」ことについて考察する。

### 自然の中の音を聴くこと

#### 自然と関わる

平成29年告示の幼稚園教育要領において感性と表現の領域「表現」[内容の取り扱い] (1) には「豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること<sup>3)</sup>」とあり、子どもが、身近な環境や自然に目を輝かせて触れ、驚き、疑問、感動などを感じられるようにと留意すべき事項を示している。また、身近な環境との関わりに関する領域「環境」のねらい(1)に「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ<sup>4)</sup>」ことのできる子どもを育てようとして示している。同領域の[内容](1)では、「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く<sup>5)</sup>」体験をさせ、(4)では「自然などの身近な現象に関心をもち、取り入れて遊ぶ<sup>6)</sup>」楽しさを味わわせようとして示している。そして同領域の[内容の取扱い](2)では、「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然との関わりを深めることができるよう工夫すること<sup>7)</sup>」とし、「自然との出会いは、豊かな感情や好奇心を育み、思考力や表現力の基礎を形成する重要な役割をもっている<sup>8)</sup>」などと解説されている。子どもが自然と関わりいろいろな体験をする中で心を揺さぶられ感動する経験が表現活動の基礎となり、活動に新たなアイデアや工夫、様々な発想などが生まれ、豊かな表現活動が広がっていくと考えることができる。そのため、自然(自然の音)に親しむ活動を行う際には、五領域を総合的、横断的にとらえていくことが大切である。自然の中の音に耳を傾け、五感を働かせ肌で感じ、じっくり音と対話しながら観察できる環境を整える必要がある。

## 聴く耳を育てる

### 感性を育む

感性は、「事象に対する感受性（気付く、感じる）や思考性（思う、考える、創造する）が活動性（関わる、行動する）と関係しながら循環的に働き、かつ、その相互作用によってそれぞれの働きがより活発になって<sup>9)</sup>」育まれていくと考えられる。たとえば表現活動において考えると、まず自らが主体的に感じたり考えたり関わったりして気付いたり心を惹かれる出来事に出会ったりする。次に自分と友達の気付きの伝え合いからイメージや思い、感動などを共有する。そして、友達と試行錯誤したり工夫したりするなどして、新たな考えや表現方法を見つけ出す。この体験や経験の積み重ねの過程において豊かな感性が育まれる。

「聴く」ことは、表現活動の基本である。歌ったり奏でたりつくったりする活動において、豊かな表現を工夫し創り出すためにはしっかり聴かなければならない。つまり「聴く耳をもつ」ことである。それと同じように、自然の中の音を聴いて心を惹かれる音などを素材に表現する活動においても、「聴く」ことは基本の活動だととらえることができる。自然の中の音を聴くことも、表現活動と捉え全く特別なことをしているのではないのだ。音は見えないものであるが、耳を働かせてじっくり聴く、見えない音を目でしっかり見て聴く、即ち「聴く耳を育てる」ことこそが、感性の育みと豊かな表現を創り出す基本なのである。子どもたちには、自然の中にある音にじっと耳を澄ませて静かに聴き、目には見えない音を心で捉えさせ、いろいろなことに気付かせたいものである。じっと聴くことから「この音は何だろう。小鳥かな？親鳥かな？何色だろう？何羽いるのだろうか？…」など、音を手がかりに音の正体を探ったりイメージしたり膨らませたりして感性を働かせるようにさせたいものだ。

## 実践

### 実践「感性を働かせて音を聴き、お気に入りの音を紹介しよう」

この実践は、「音さがしの本 リトル・サウンド・エデュケーション」（著者：R. マリー・シェーファー（R. Murray Schafer）、訳：今田匡彦、発行者：春秋社）を参考にし、子どもの指導法「音楽表現」の授業で取り組んだ。この授業は、1コマを前半と後半に分けてA：領域「表現」（音楽）に係る演習を45分間、B：ピアノ演奏技能に係る演習を45分間行う。人数の関係で受講クラスを2班に編成し、1班は前半にA、後半にBを行い、2班は前半にB、後半にAを行う。本稿の実践は、Aの演習で取り組んだものである。

#### 1. 活動の概要

感性を働かせて、自然の中の音や身のまわりの音に耳を澄ませ、その音を記録する。その音を他者と共有したり自分のお気に入りの音を紹介（発表）したりする。



4. 授業を行った日時、活動したグループ

2021年6月 A～Dグループ、2022年5月～6月 E～Hグループ

5. 参加した学生総数・・・67名

6. 授業の様子

観察は、誰とも会話をせず自身の音も一切出さないうで、耳を澄ませ音に耳を傾け行った。山から鳥の鳴き声や風の音、こども園から子どもたちや先生の声、駐車場にやって来た人の足音など、多くの音と出会うことができた。約15分間だったが学生たちは多くの音を見付け、「音のスケッチ」(記録用紙)にどんどん書き込んでいった。観察した年月日、気象条件等の環境が異なるため、学生の記録から「人が草を踏む音」「土や砂利を踏む音」「コンクリートを踏む音」「鳥の声」「鳥の鳴き声」「草や木が風に揺れる音」「中・高校から聞こえたチャイム」「食堂の室外機」など8項目を抽出して筆者が表にまとめた。本稿では、紙面の都合で8グループのうち4グループを掲載する。日によって聞こえる音が若干違ったため、項目を削除したり追加したりした。(表2～表5参照)

【Aグループ】

表2 Aグループの観察記録

- 1 実施日 2021/6/18(金)11:00～11:15
- 2 天候 曇り
- 3 観察場所 本学グラウンド
- 4 調査人数 8名

聞こえた音	学生①	学生②	学生③	学生④	学生⑤	学生⑥	学生⑦	学生⑧
人が草の上を歩く音	ザックザック、	サッサッ、					ザッザッザッ、	サワサワ、
人が土や砂利を歩く音		ジリジリ、 ジャリジャリ、	ザッザッ、	ザッザッザッ、 ザクザクツ、	ザッザッ、			
人がコンクリートを歩く音		トントん、		コトコト、 パタパタ、				コッココ、 パタパタ、
鳥の声	ピーピー、	チュンチュン、 ピュピュツ、 チュツチュツ、	ピーピー、 ピビピビ、 チュンチュン、	ピチチー、 ピューピュー、		ジージー、 ビビビ、 チュンチュン、	ピヨピヨ、 チュツチュツチュツ、	ピーピー、 チュンチュン、
鳥の鳴き声	カーカー、 コーコー、	カーカー、 ガッガッ、	カーカー、	カーカーカー、 ガアガア、	カーカー、	カーカー、	カーカー、	カーカー、
草や木が揺れる音	カサカサ、		サッサッ、					
チャイムの音	キンコンカン コン、	キンコンカン コン、	キンコンカン コン、	キンコンカン コン、	キンコンカン コン、	キンコン、		キンコンカン コン、
エアコンの室外機の音	ゴーゴー、	ゴーゴー、	ザー、 サー、	ゴオーツ、	ゴオーゴオー、	ポー、	ポー、	ゴーゴー、

【Cグループ】

表3 Cグループの観察記録

- 1 実施日 2021/6/23(水)9:20～9:35
- 2 天候 晴れ
- 3 観察場所 本学グラウンド
- 4 調査人数 10名

聞こえた音	学生①	学生②	学生③	学生④	学生⑤	学生⑥	学生⑦	学生⑧	学生⑨	学生⑩
人が草の上を歩く音	ジャリジャリ、 ザッザッ、	ザクザク、 ジャリジャリ、	ジャッザッ、					カサッ、 ザッ、	ミシッミシッ、 カッサー、	
人が土や砂利を歩く音	バリバリブーン、	ジャリジャリ、	ゴロゴロ、 ジャリジャリ、 ゴロゴロ、	ジャリジャリ、 トントん、	ズリズリ、 サッサ、	ザッザッ、 ガタガタガタ、 カッサ、	カサアー、			ズリズリ、
人がコンクリートの上を歩く音			ジャッザッ、							
鳥の声	チュンチュン、 チュツチュツ、	ピーピー、 チュンチュン、 ピッピッ、	チュチュ、 ピヨ、 チュン、 ピッピッ、	チュンチュン、	ピュピュ、 チュンチュン、	チチチ、 チュンチュン、	チュンチュン、 チーチー、	チュンチュン、 ピヨピヨ、 ピーピー、 チーチーチー、	チチチー、 チュンチュン、 ピッピッ、	チュツチュツ、 ピヨピヨ、 チュンチュン、
草や木が揺れる音	サーサー、 サワサワ、 サワサワ、	サラサラ、 ピキピキ、 ワサワサ、	カサカサカサ、	サー、 サラサラ、	サー、 サラサラ、		サーサーサー、	サーサー、	サーサー、 サッサーサッ サー、	サワサワ、
風の音	サーサー、	サーサー、 ヒューヒュー、	サーサー、 サササササ、	サーサー、 サササササ、	サー、 サラサラ、	ゴー、 ササ、				
エアコンの室外機の音	ゴーゴー、	ゴーゴー、	ゴー、	ゴオー、	ゴオー、	ゴオー、	ポオー、	ブーン、 ゴー、	ゴーゴーゴー、 ザーザー、	ゴー、 ブー、

表4 Eグループの観察記録

【Eグループ】

- 1 実施日 2022/5/18(水)9:20~9:35
- 2 天候 晴れ
- 3 観察場所 本学グラウンド
- 4 調査人数 9名

5 聴こえた音	学生①	学生②	学生③	学生④	学生⑤	学生⑥	学生⑦	学生⑧	学生⑨
人が草の上を歩く音	ザッザッ、				サーサー、				
人が土や砂利を歩く音				ザッザッザッザッ、					ジャリジャリ、
鳥の声	ビービービー、 ビビビビビ、 ビービョロビー ビョロ、	ウィーヴォロロー、 ビチヨビチヨビチヨ、 ビヴォロロ、 ビロビロ、 ピフォフォフォ、 ニャッニャッ、 ジャジャジャジャ、 ビービービー、 ビビニーニャッニャッ、	ビーチビーチビー チ、 チュンチュン、 ジジジジ、 チュン、 ビビ、	ビービー、 チチチチチ、 ビュビュビュビュ、 ビッピッ、 チュンチュン、 ビュルビュル、	ビービー、 ツクツクビー、 ピーチクピーチク、 ビルルル、 ミーンミーン、 ビスビス、	ビヨビヨ、 ビビビビ、 ビチチチ、 ビィビィ、	チュンチュン、 ピーチピーチピー チ、 ビスビス、 ビービー、 ピッピッピッ ピッ、 ビービー、	チュチュビー チュチュビー、 ジジジ、 クルルル、 ビチビチビ チュビ、 ビ ビ ビ、	ビービー、 ビヨビヨ、
鳥の鳴き声			カーカー、	カーカー、	カーカー、				
草や木が揺れる音	サーサー、								サーサー、 カサカサ、
チャイムの音	キンコンカン コン、	キンコンカンコン コン、			キンコンカンコン、	キンコン カンコン コン、	キンコンカン コン、		キンコン カンコン、
エアコンの室外機の音	ブォー、	ギイー、ゴォー、	ポー、	ゴー、	ブォー、	ゴォー ゴォー、			

表5 Hグループの観察記録

【Hグループ】

- 1 実施日 2022/5/27(金)11:45~12:00
- 2 天候 晴れ
- 3 観察場所 本学グラウンド
- 4 調査人数 9名

5 聴こえた音	学生①	学生②	学生③	学生④	学生⑤	学生⑥	学生⑦	学生⑧	学生⑨
人が土や砂利を歩く音				ザザザザザ	ザッザッ				
鳥の声	ビー、 チュンチュン、 ビビビ、	ビービー、 チーチー、	ビビビ、 チチチ、 ビービー、 ビョビョ、	チュンチュン ビー、 ビービビビ、 チュンチュンチュ チュン、 クルビークル ビー、 チュチュビー チュチュ、 ピッピッピッ ピッ、	ビロロロロ…、 ビービョビー ビョ、 ビービービビビ ビビ、 チロチロ、 チチチチ…、	ビュイービー、 コッココココ コ、 ビービビ ビービ ビ、	ビチビチ、 ビービー、 ビッピッ、	チュチュン、 ビリビリ、 チョチョ、 ビリビリリン、	ピーチッピッ、 ビビビ、 チチチチ、 チュンチュン、
カラスの鳴き声	アーアー、	カーカー、	アーアー、 カーカー、	カーカー カーカー、 カー、 カー、	カーカー カー、 カー、 カーカー カー、	カーカー、	カーカー、	カーカー、	カーカー、 カー、
草や木が揺れる音	サーサー、 サワサワ、	カサカサ、	カサカサ、	ズズズズ、 サワサワ、 そよそよ、	カサカサ サ…、	ザー、			
風の音			ザァー、	ザァーッ、		フアーフアー、			ザー、
チャイムの音		キンコンカン コンコン、	キンコンカン コン、			キンコンカン コン、	キンコンカン コン、		
エアコンの室外機の音	ポーポー、		ゴーゴー、	ザァー、 ブーン、	ブーン、	ゴーゴー、	ゴーゴー、	ポーポー、	ジー、

また、学生の気付き（抜粋）も整理し掲載した。

観察後、聴き取った音の整理を行った。そして、聴き取った音を友達と伝え合い、音の共有をした。「えーっ、そんな音があった?」「あっ、一緒。私も聴いたわ。」「同じ音なのに、文字にすると違った感じに聞こえるね」「そんなにあった?すごい。」等のつぶやきがあちこちから聞こえてきた。その後、自分のお気に入りの音の一つを選び全員に発表をした。音は、音高、リズム、速さなど本物の音を再生しているかのように口頭で再現することを条件にあげた。本物のように再現した学生に対して、「すごい」「その音、あった、あった」といって、突然拍手が起こった。一方、「〇〇みたいな音でした」と言葉だけで伝える学生も多く、「本物のように模倣し再現してください」と求めると、「えーっ、本当にするんですか?」「無理です!」等々口々に言っていたが、



はにかみながらも発表を行った。心に残った音即ち感動の音を伝え合う楽しさを体中で味わうことのできた授業だった。

○学生の気付き（抜粋）

(1) 音と対話し、身のまわりは音で溢れている

- ・こんなに自然の音が鳴っていて、身のまわりには多くの音があると気付かされた。
- ・静かな時間に五感を研ぎ澄ませ、鳥の鳴き声などを感じられて気持ちよかった。
- ・音に意識を向けると、短時間に様々な音などが存在していた。
- ・自然の音、身のまわりの音を意識していなかった。様々な音があり面白かった。
- ・日頃気にしていなかったが、思ったよりいろいろな音がまわりにあり驚いた。

(2) 音と対話し、一つ一つの音に気付く

- ・よく聴いてみると、風にも音があった。一つ一つのものには音があるんだと感じた。
- ・鳥だけで様々な鳴き声があると少しだけ面白いと思ってスケッチした。子どもとこういう自然のかかわりをもってコミュニケーションなど大切にしていきたい。
- ・セミの声もあった。夏にいるものだと思っていたセミが今の時期でもいて驚いた。
- ・普段なら聞き逃してしまう音や聞こえない音も聴こえて、様々な音が潜んでいた。
- ・音の発生源を見なくても、ある程度何の音か分かったのはおもしろいと思った。

(3) 音と対話し、自然の音が私の心を癒やしてくれる

- ・耳を澄ませて自然の音を聴くと、リラックスできた。とても心が落ち着いていい。
- ・静かな時間に五感を研ぎ澄ませ、鳥の鳴き声や風や雨の音を感じられてとても気持ちよかった。生で聴く自然の音は遠近など音の感覚がより繊細に感じられた。録音された音では分からないものが伝わってくるようだった。
- ・自然の音を久しぶりに聞くと、とても心が落ち着いた。
- ・普段気にしない小さな音も聴こえてきて「私って生きている。たくさんの音に囲まれているんだ。」と思った。15分間だったが普段味わえない楽しい時間だった。
- ・自宅の前の海から風を感じ触れながら波の音を聴いて癒やされたことを思い出した。
- ・音楽を聴くことや電子音を聞くだけではなく、このような自然の中で発されている音にじっくり触れることにより、自然に対して興味がわいた。

(4) 伝え合うことから、感じ方は一人一人違うと気付く

- ・聞きなじみのある音でも、文字に表すことは新鮮でもあり難しいとも感じた。
- ・こんなにじっくり外の音に耳を傾けたことはないと思った。友達と音を共有したとき、私が聴いていない音もあった。同じ音を聴いているのに表現の仕方が違って面白かった。同じように聴いていても人それぞれ聴こえ方、捉え方が違うのだということに少し驚いた。
- ・普段気づかない音、気にしない音があった。ブォーとゴーでは感じ方が違った。

(5) 伝え合うことから気付く

- ・他者とどう聞こえたか何が聞こえたか伝え合い、共有することで同じ鳴き声でも表現の違いが感じられて楽しかった。
- ・私には聞こえなかった音を友達は聴いていた。もっと耳を澄ませると聴こえるかも。
- ・他者と音を伝え合い、共有した時、同じ音でも様々な音の表し方があると気付いた。
- ・友達と同じ音を聴いていても聴こえ方が違い、人の感性は豊かなのだと感じた。

(6) 本物に出会うことが大切だ

- ・実際に外に出て立って観察すると、風やにおいも感じる事ができた。テレビやスマホ等から見たり聞いたりするだけでは感じとれないことがあると思った。何事も本物を自分の耳で目で鼻で感じる事が大切だと改めて思った。

## 結 果

学生の気付きの主な内容は以下の通りである。

- ・自然の中の音は普段から聞いているので予想通りだった ……1%
- ・普段自然の中の音を聴く機会がなく、音を聞かなくなっていた ……76%
- ・鳥はいろいろな鳴き声で鳴いていることに驚いた ……43%
- ・観察した音を共有することで、さらに発見する事ができた ……25%
- ・鳴き声を文字に表すのは難しいと思った ……19%
- ・自然の中の音を聴くとリラックスでき、気持ちが良かった ……18%

草や木、鳥や虫、風などの自然は、特別なところに向かなくても私たちの身近にある。幼少の頃は虫を捕ったり花を見たり木に登ったりして自然と遊んでいたであろう学生たちは、「音」を通して自然を改めて再認識したことが学生の気付きから見えてきた。また、ほとんどの学生が、「音」を文字で表すのは初めての経験であった。好きな音を表現する活動で「再現する」ことは、学生全員が初めてのことでとても苦勞して発表した。

## 考察と今後の課題

自然の中の音に耳を傾け見付けた音や気付いた音と主体的に対話し、響きや神秘さ、美しさに心を惹かれ感動する気持ちをもつ活動にとどまらず、音を文字で表現する、音を再現する活動であった。一般的に鳥は「カーカー」というが、学生達は「アーアー」「コーコー」「ガッガッ」と、鳥の鳴き声を「ピーピー」「ピロロロロ」「ピーヒョピーヒョ」「チュチュピーチュチュ」「クルピークルピー」など、いろいろな鳴き声を文字にしている。表現の感性を磨くには「音の印象を文字に変換する技法」を習得しなければならないが、そのためには「自分の身体を『感覚装置』に見立てることが起点<sup>10)</sup>」となる。そして、「言葉をもたない『音』の質感を言葉に置きかえるのは、けっしてやさしいことではない。しかし、よく聴けばよく聴くほど、音の文章表現も、想像性にあふれた構



成や文体へとかわっていくことであろう。文章化する過程は、音について考えをめぐらせる過程でもある。聴こえた音を言葉に表す行為は音をよく聴くことにつながり、よく聴こうとすればするほど、その表現もまた、多彩なものとなる<sup>11)</sup>」のである。今後、よく聴く活動による感性の多様性を尊重し、思いを丁寧に受け止め、他者と自分のイメージを伝え合い共有し合える表現活動を考えていきたい。

## 引用文献

- 1) 小西行郎・小西 薫・志村洋子. (2017). 赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育第2巻：運動・遊び・音楽. (p.98). : 中央法規出版.
- 2) 小西行郎・小西 薫・志村洋子. (2017). 前掲書. (p.98).
- 3) 文部科学省. (2018). 幼稚園教育要領解説. (p.244). : フレーベル館.
- 4) 文部科学省. (2018). 前掲書. (p.193).
- 5) 文部科学省. (2018). 前掲書. (p.195).
- 6) 文部科学省. (2018). 前掲書. (p.198).
- 7) 文部科学省. (2018). 前掲書. (p.209).
- 8) 文部科学省. (2018). 前掲書. (p.209).
- 9) 無藤 隆. (2018). 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿. (p.105). : 東洋館出版.
- 10) 無藤 隆, 監修・吉永早苗. (2016). 子どもの音感受の世界. (p.217). : 萌文書林.
- 11) 無藤 隆, 監修・吉永早苗. (2016). 前掲書. (pp.217-218).

## 参考文献

- 無藤 隆, 監修・吉永早苗. (2016). 子どもの音感受の世界. : 萌文書林.
- R. Murray Schafer. (1996). 音さがしの本 (今田匡彦, 訳). (2004). : 春秋社.
- 吉永早苗. (2021). 「音」からひろがる子どもの世界. : ぎょうせい.

